《書　評》

エマニュエル・ボンガルトネル著：『竪琴と剣と／散文『トリスタン』における伝統と革新』

Emmanuèle Baumgartner : *La Harpe et l'épée / tradition et renouvellement dans le 《Tristan》 en prose* (SEDES, 1990)

嶋　﨑　陽　一

中世フランス文学に対する関心は，ここ日本でも近年わずかづつながら高まりを見せていて，翻訳出版される作品，研究書の類も，つい10年ほど前では望むべくもなかったほど多岐にわたるようになった。目ぼしいものに限って例を挙げても，11世紀の『聖アレクシス伝』から15世紀のフランソワ・ヴィヨンに至る文学史の流れの中から代表的な作品を選んで訳出した『フランス中世文学集』全3巻（新倉俊一・神沢栄三・天澤退二郎訳：白水社，1990-1991）はまさに記念碑的労作と呼ぶことができるだろうし，また研究書に関しても，碩学J・フラピエや歴史家J・ル・ゴフらの興味深い著作[1]が次々に紹介されるなど，岩波文庫などに収められたごく少数の作品以外には非専門家が中世のフランス文学に触れる機会のほとんどなかった頃に比べると，まさに隔世の感がある。

これらの新しい流れの中心となっているのが従来より未訳のままであった作品，作家（クレチアン・ド・トロワ，ジャン・ルナールの諸作品など，特に重要と思われるものだけでも相当数に及ぶ）の紹介であるのはもちろんだが，他方以前より注目されていたものについても，新訳，研究書がいくつか提起され，中世文学全体に対してグローバルな見直しが始まりつつまるということもできよう。分けてもトリスタン伝説に基づく作品群に関しては，佐藤輝夫氏による大部の研究書『トリスタン伝説』（中央公論社，1981）以来，研究，紹介ともにやや停滞ぎみではあったが，ここにいたって前述の『フランス中世文学集』第1巻に新倉氏訳でベルール，トマの断片，二つの『トリスタン狂恋』[2]及びマリ・ド・フランスの『すいかずら』と，韻文によるフランス語作品の大部分（韻文作品では他にジェルベール・ド・モントルイユの『聖杯物語続編』などにトリスタンが登場する）が収められたほか，『狂恋』については天澤衆子氏訳（『もの狂いトゥリスタン』思潮社，1992）も刊行され，さらにドイツ文学の側からも，中世末に愛読されたいわゆる民衆本『トリスタン』の翻訳（小竹澄栄訳『トリストラントとイザルデ』国書刊行会，1988）が発表されるなど，新たに活発な動きが見られるようになってきた。

しかしそうした動向の中で，13世紀前半にベルール，トマらの後をうけて書かれ，ついにはそれら韻文作品を駆逐するほどの大流行した長大な物語，散文『トリスタン』については，無視されるとまではいかないにしても，以前に変わらず等閑視され，いくつかの誤解をかかえたまま現在に至っているように思える。これは一つには本国フランスにおいてさえ作品に対する偏見が根強く存在しているうえに[3]，参照に必要な校訂版がごく近年に至るまで刊行されず，写本に直接あたることのできない日本では，先行する研究にある誤謬をただすのもままならない状況が続いていたことによるところが大きい[4]。久しく待望されていた校訂版は現在完結に向かいつつあり[5]，日本においてもこの大作が正しく評価される日は近いことと思う。

＊＊＊

著者のボンガルトネルは，75年に国家博士論文に基づく『散文『トリスタン』／一中世物語の解釈の試み』[6]を発表しており，90年の『竪琴と剣と』は，散文『トリスタン』に関する2冊目の著作にあたる。前著の中心をなしていたのは，膨大かつ錯綜する写本の分類や異本の系統決定などの実証的研究であって，作品の内容に関してはやや大まかな分類整理を試みていたにすぎない。むしろ，内容への評価という点では，「テクストの純粋に文学的な価値について，この作品を現代の読者が素直にたのしめるかどうか，より広い大衆から支持を得られるかどうかについては［……］態度を保留しておこう[7]」と，かなり消極的であった。それに対し今回の著作では，前著発表以降の中世文学研究の新たなる展開（一次資料のレベルで言えば，散文『トリスタン』校訂版の刊行開始，散文『ランスロ』校訂版の完結[8]をまず挙げることができるだろうし，加えてロジェ・ドラゴネッティの『中世における文字の生』[9]，シャルル・メラの『王妃と聖杯』[10]に代表されるような，批評言語の劇的なパラダイム変換がこの間に達成されている）を充分に吸収したうえで，散文『トリスタン』の持つ魅力と独創性について，積極的に分析，評価していこうという態度を鮮明に打ち出している。

ボンガルトネルによれば，散文『トリスタン』に関してまず注目すべきは，この作品がさまざまな位相において先行作品の「リメイク」として構想されていることである。このことは，単にいくつかあった韻文によるトリスタン物語の散文化であることを意味してはいない。それは第一に，散文『ランスロ＝聖杯』のトリスタン物語への埋め込みによるアーサー王物語全体の読みかえであり，また，沈痛なトーン一色に塗り込められた伝説に対して，別の色合いを重ね合わせていくことによる物語再生の追求であり，さらには12世紀に「発明」されて以来，多くの文学的イメージの堆積によって過負荷状態となっていた「愛」の理念の書きかえの試みでもある。

トリスタンとアーサー王宮廷のつながりは，現存のもっとも古い韻文トリスタン物語で既に触れられており，12世紀以降の騎士道物語の人気を二分した二つの物語世界がいずれ一つに統合されるのはその限りにおいて必然と言えた。しかし，散文『トリスタン』において試みられた『ランスロ＝聖杯』三部作との統合は，単なる二つの世界の出会いにとどまらない。その一例が，トリスタンの円卓の騎士叙列，聖杯探索の冒険への参加である。この書きかえは，三部作で大きく掲げられた，ひたすらに高みを希求する聖杯探索の理念を無傷のままにおかない。現在知られている本文には，三部作中特に『聖杯の探索』からのテクストが多く挿入されているが，このコラージュの中で，聖杯探索の試みは，その崇高さを今一つ信じる気になれないトリスタンの存在によって高みから引きずりおろされたうえ，『探索』冒頭から引用された円卓の騎士たちの四散を嘆くアーサー王の不安が，それに乗じてアーサー王の宮廷を侵略しようとするマルク王の計略によって現実のものとなることで，一挙に不吉な様相を帯びてくる。『ランスロ＝聖杯』と共通する様々なモチーフを作品中にちりばめながら，散文『トリスタン』は常にその深層に徹底的な読みかえを企て，アーサー王物語世界の価値観を揺さぶりにかかる。

散文による「リメイク」が変質させるのは外部からとりこんだ世界だけではない。トリスタンの姿，物語の色合いも以前のままではない。トリスタン，イズー，マルク王の3人を中心とする閉鎖的な状況の中で沈鬱一方であった物語を，散文の二人の作者，リュース・デル・ガとエリ・ド・ボロン（共に偽名）は「美しく，心地好い物語[11]」に仕立てなおそうと試みる。しかしこの表現は散文『トリスタン』について否定的に語るときによく引き合いに出される。牧歌的な「雅びなる日々」の延々たる喚起をさしているのではない，とボンガルトネルは主張する。作者の意図する心地好さとは，登場人物のそれぞれが，愛について，武勲についてひたすらに紡いでいく言葉から生まれるもの，それも，ベルールの物語の中でイズーが一度ならず巧みに仕組んだような，人を欺くために操られる言語ではなくて，「遍歴する騎士たちの往還を結びつける数々の《語らい》のなかで，世界を心ゆくまで解きあかし，恋愛なり勇猛な冒険なりについて注釈し議論する[12]」ことに費やされる，過剰なまでに全編にちりばめられた言説がも

たらす楽しみのことである。この饒舌が物語の展開にとっては蛇足であると考えてはならない。その果てに浮かび上がるのは「騎士の規律の根拠のなさ，愛と武勲の結び付きの不安定さ[13]」，つまりは既存の騎士道物語が金科玉条としていた価値体系への挑発であり，そこにこそ散文『トリスタン』という，見ようによっては散漫なエピソードの羅列にすぎない異貌の長編の引力の中心があるのだから。

このような饒舌を踏まえ，さらにそれを越えて，全編を通じて最も強い調子で告発されるのは，それまでの騎士道物語の理想を支えていた愛の理念である。もちろん，トリスタンとイズーをめぐる愛のありようは，そもそもの初めから宮廷的な愛の概念とは対立するものであったが，ここでは，対立をより鮮明な形で提示しながら，アーサー王物語のもつ価値体系を一挙に相対化することが目論まれている。例えばトリスタン伝説の主舞台たるコルヌアイユは，散文『トリスタン』では，騎士道モラルの腐敗した，侮蔑されるべき土地として描かれ，アーサー王の治めるローグルとの対照から，「愛の力と武勲の背反，アーサーの理想的世界でしか通用しないモデルをマルクの王国へ持ち込むことの不可能性[14]」が明らかにされる。騎士道文学が追求してきた愛と武勲の理想的合一はこの物語の中では幻想に過ぎなくなる。「この世界にはもはや，女性への愛から自らの力と熱情を引き出そうという騎士や，愛欲の美を称えあげる詩人のいる場所はない[15]」。この点，恋人たちの埋葬の場面は実に象徴的だ。二人の亡骸はコルヌアイユに埋葬されるが，トリスタンの盾と剣はカマアロに持ち去られる幕切れは，物語における「愛と武勲，トルーヴェールの竪琴と騎士の剣[16]」の蜜月の終焉を見事に暗示している。

それでは，竪琴と剣の決定的な分離のあと，騎士道物語はどのようにして可能なのか。ボンガルトネルによれば，散文『トリスタン』は愛の不毛こそを物語の出発点としている。ここで騎士たちは，まさに「散文」的なるもの，愛によって裏づけられることのない武勲それ自体を求め続けて行動するしかない。愛という「抒情」は何も生み出さず，騎士を高みに引き上げることもしない。「抒情」におぼれた果てにあるのは「死」のみである。物語のクライマックスにおいて，トリスタンはイズーの前で歌を歌っているところをマルク王に襲われて命を落とす。「騎士は死の危険を冒すことなしに，散文を捨てて韻文を，英雄的行動を捨てて愛の抒情を，剣を捨てて竪琴をとることはできない。[……]悲しきコルヌアイユでトリスタンが死ぬのは，ついに騎士としての孤独な遍歴をおいて竪琴の調べと王妃の部屋を選んだからである[17]。」

＊＊＊

ボンガルトネルの著作についていつも感心させられるのは，まれに見るバランス感覚の良さである。大胆で，時には奇想天外とも思える着眼点から出発しても，一部の先鋭な論客とは異なって，論証は常に常識的に納得できる範囲を逸脱することがない。本書も，子細に検討すればいくつかの不満はあるが（例えば，参照点として作品中に引かれる「物語」と話者の間の位相差の解消の持つ意味合いについては，より踏み込んだ論議が可能であろう），散文『トリスタン』という，まだまだ知られていない傑作についての入門書としては，好個の一冊ということができよう。

註

1）　ジャン・フラピエ（天澤退二郎訳）『聖杯の神話』筑摩書房，1990
　　ジャック・ル・ゴフ（池上俊一訳）『中世の夢』名古屋大学出版会，1992他。

2）　新倉氏訳では『トリスタン佯狂』となっているが，原題 *Folie Tristan* の持つ多義性を考えると『狂恋』と訳すのがより適切であろう。この点に関しては，J. Shaefer,《Tristan's Folly : Feigned or

Real?》 in *Tristania*, t. 3, n°1, 1977, pp. 3-16 を参照されたい。

3) Cf. D. Boutet et A. Strubel, *La Littérature française du Moyen Age*, P.U.F., (*Que sais-je*), 1978, pp. 46-47.

4) 散文『トリスタン』に関する誤謬のうち最たるものは，B.N.fr.103 写本に関するものであろう。その結末部分は他のいかなる写本とも異なり，ベルール，アイルハルト系韻文物語と同じ本文となっているが，これがJ・ベディエの推測にもかかわらず，散文『トリスタン』そのものと何の係わりもないテクストの後世の流用であることは疑いない。つまり，この結末部分を基に散文『トリスタン』に韻文物語の分類を当てはめてベルール系かトマ系かを云々するのは全く意味がない。さらには，いわゆる『狂恋』のエピソードも散文ではこの本文にのみ存在するもので，散文『トリスタン』には韻文物語と同じ『狂恋』のテーマは現れない（散文中の *Folie Tristan* のエピソードは散文『ランスロ』からの *Folie Lancelot* の流用であって，全く別個の物語である）。

Cf. Emmanuèle Baumgartner, *Le 《Tristan en prose》 / essai d'interprétation d'un roman médiéval*, Genève, Droz, 1975, p. 79ss.

5) Renée L. Curtis (éd.), *Le Roman de Tristan en prose*, 3 vol. Cambridge, Brewer, 1985.

Philippe Ménard (dir.) *Le Roman de Tristan en prose*, 5 vol. parus, Genève, Droz, de 1987 en cours.

Joël Blanchard (éd.), *Le Roman de Tristan en prose, Les Deux Captivités de Tristan*, Klincksieck, 1976.

このうちメナール版は，一部重複はあるがカーチス版の終わったところより本文を始めている。ブランシャール版は他の二者とは異なる系統の本文を扱ったものである。

6) Emmanuèle Baumgartner, ouvr. cité.

7) *ibid*., p. 330.

8) Alexandre Micha (éd.), *Lancelot, roman en prose du XIII*[e] *siècle*, 9 vol., Genève, Droz, 1978-1983.

9) Roger Dragonetti, *La Vie de la lettre au Moyen Age*, Seuil, 1980.

10) Charles Méla, *La Reine et le Graal*, Seuil, 1984.

11) Ed. Curtis, t. 1, § 229.

12) *La Harpe et l'épée*, p. 100.

13) *ibid*., p. 103.

14) *ibid*., p. 143.

15) *ibid*., p. 145.

16) *ibid*., p. 146.

17) *ibid*., p. 159.